



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	熊野純彦『西洋哲学史—古代から中世へ』（岩波新書）
Author(s)	田中, 伸司
Description	書評
Citation	哲学, 42, 33-37
Issue Date	2006-07-18
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/35038
Type	departmental bulletin paper
File Information	42_RP33-37.pdf



《書評》

熊野 純彦

『西洋哲学史—古代から中世へ』（岩波新書）

田 中 伸 司

本書はオーソドックスな体裁で書かれている。各章には表題と哲学者たちの名に加えて焦点となる命題が掲げられており、それらを一瞥する限りでは、「哲学者たちとその学説」にかんする、簡潔な情報」（「まえがき」i）が詰め込まれた、よくできた教科書と思われるかもしれない。各章の扉にはそれぞれの主題を踏まえた興味深い造りがなされておおり、そのような印象を一層強めるであろう。しかし、そうした一般的な哲学史との違いを意識して、本書は書かれている。著者によれば、「哲学的な思考とは、なにか情報を伝達しようとするものではなく、「哲学者たちの思考は、それぞれの哲学者にとつて出発点となった経験の場面から……かううじてことばを紡ぎだし、撚りあわせようとしたもの」（「まえがき」i）だからである。哲学史が「確実に哲学そのもの」であるのは、「テキストとともに思考を継続すること」（「あとがき」二五七頁）に他ならないからである。それゆえ、著者は読者に向けて三つのことを約束する。「ひとつは、それぞれの哲学者たちの思索がおそらくはそこから出発した経験のかたちを、現在の私たちにも追体験可能なしかたで再構成すること、もうひとつは、ただたんに思考の結果だけをならべるのを避けて、哲学者の思考のすじみちをできるだけ論理的に跡づけること、第三に、個々の哲学者自身のテキストあるいは資料となるテキストを、

なるべくきちんと引用しておくこと」(「まえがき」iii)である。

これら三つの約束を本書が果たしているかどうかを見ていく前に、古代中世の哲学についての著者の立ち位置を測っておこう。というのも、著者は古代中世の哲学のテクストの読み手としてよりも、むしろ近現代の哲学のテクストの優れた読み手としてつとに知られているからである。著者は古代中世の哲学について「それは現在でも哲学の現場にしばしば呼び戻されて、その探求をみちびく、なおも生きつづけている思考の運動」(「まえがき」iii)であると述べる。実際、いくつもの章において近現代の哲学者たちが古代中世の哲学のテクストをめくりどのように関わったのかについて相当の紙幅を割いており、それが本書の哲学史としての一つの特徴となっている。本書の末尾には人物紹介を兼ねた人名索引が付されているが、そこを見ていただければ、近現代の哲学者たちがどれほど登場しているかが容易にお分かりいただけるであろう。たとえば、アウグスティヌスを扱った第11章では、アウグスティヌスとデカルトとの本質的なつながりをレヴィナスに触れて論じ、さらにアウグスティヌスのテクストをめぐるフッサールやヴィトゲンシュタインたちの思考のかかわりについて(古代中世の哲学史についての一般的な理解からすると)かなり踏み込んだ論述を行っている。しかし、古代中世の哲学のテクストはたんに近現代の哲学者たちの視点を介して読まれているのではなく、むしろ著者自身の探求を導いてきたテクストでもある。それはこれまでの著作においてすでに明らかであった。たとえば『レヴィナス 移ろい行くものへの視線』(岩波書店、一九九九)の前景をなしているのは「世界の始原(アルケー)」をめぐる思索である。『レヴィナス』第I部第二章「自然の贈与―始原的な世界をへく」で「あじわうこと」から第三章「所有と労働―世界に対してへ手へで働きかけること」における論述が、たとえば本書第一章「哲学の始原へ」へとつながっているのを見るのはむしろたやすいことであろう。また、『レヴィナス』第II部第三章「主体の綻び／反転する時間」あるいは「ヘーゲルへ他なるものをめぐる思考」(筑摩書房、二〇〇二)第二章「歴史 理性 他者」での考察が、本書の『パルメニデス』や『ソフィスト』(そして『ピレボス』)についての記

述〔異〕をめぐる、たとえば五五頁や九一―九四頁の記述を支えていることも、多言を要しないであろう。著者にとって古代中世のテクストは確かに「最上の *classicus*」と呼ばれるべきものである¹。

さて、上述の著者の約束に帰ることにしよう。哲学者たちにとつての出発点となった経験のかたちを再構成すること、そして論理的に跡づけること、テクストをなるべく引用すること、これらの三つの約束は、結局のところ、テクストの読解こそがすぐれて哲学的な営みであると示すことである。というのも、著者の理解にしたがえば、「哲学者たちはたいていの場合、なによりもある哲学的なテクストの作者、もしくはテクストを介して伝承されてきた、思考のない手なのであつて、それぞれの思考が織りあげた作品をべつにして、その哲学についても、哲学者についても、ほんとうの意味では語ることができない」〔まえがき〕ii〕からである。それゆえ、著者は、哲学的な思考が「それだけに魅力的なテクストというかたちで残されているしだいを、すこしだけでも示すことができれば、と考えています」〔まえがき〕iii〕と希望を語るのである。では、哲学的なテクストとは、あるいはテクストを介して伝承される思考とはどういうことなのであろう。実は、これらの実例を示すことこそ本書の狙いであるとも言える。本書はそのため息の長い記述を行うことになる。たとえば本書はプラトンに一章を割いているが、その章（第6章）を読むだけではプラトンのテクストの全体像を見逃す仕組みとなつている。というのも、プラトンの対話篇がテクストであるのは文字で書かれたという事実にあるのではなく、読み解かれることによつてであり、そしてその読解の質に支えられてであるからである。すなわち、プラトンのテクストをプロティノスが読み（第10章）、そのプロティノスのテクストがボエティウスのそれへとつながり（第12章）、あるいはプラトンとプロティノスのテクストはアウグスティヌスへと流れ込む。そして「トマスにもアウグスティヌスの思考の痕跡が消しがたく刻まれ、プラトン主義の色こい影が落ちている。」（二三―二四頁）そして、このように伝承されるプラトンの思考を、本書を通じて読者であるわたしたちが読み解くのである。たんに教説の解説ではなく、テクストを引証することによつて論点自体を紹介しようとする本

書の試みは、テキストを読解することが確かに哲学の営みであることを見事に示してくれている。

したがって、本書の哲学史としての特徴は引用されるテキストに現れることになる。しかも、たんに引用を連ねているのではなく、引用したテキストときには独特の仕方で読み解いてみせる。たとえば、プラトンの『法律』をめぐる記述（九五―九六頁）の中で、著者はデリダにことよせて「アテナイからの客人」のことはを読み解き、「（プラトンの）老成なのか、老いの蒙昧なのかは、わからない。変化への敵意は、あるいは、不変のアイデアをめぐる思考の果てであった。」（九六頁）と読者を挑発する。他方、古代の懐疑論を扱った第9章ではデカルトの方法的懐疑から筆を起し、「懐疑論それ自体はついに哲学そのものとはなりえないのではないだろうか。」（二四八頁）と結論しつつも、ピュロン主義の十箇の判断停止の諸方式トロポイをテキストとともに丹念にたどっていく。著者は「哲学にかんする、私自身の考えかたを押しだすことは禁欲しましたが、焦点とする論点のえらびかたに、著者の好み²が、それでもすこしは反映されているかもしれません。」（あとがき「二五五頁」）と控えめに述べている。しかし、テキストの引用には明らかに「著者の好み」が反映されている。少なくとも、焦点となる論点において引用されるテキストが著者の哲学的な関心に応ずるかたちで選ばれていることには、読み手としては十分に注意を要するであろう。たとえば、本書から哲学史を学ぶ人たちはプラトンの主要なテキストを『国家』であるとは思わないかもしれない。本書においてもプラトンの思考は「アイデアをめぐる」（七九頁）ものと考えられているが、その論点は『パイドン』から『パルメニデス』そして『ソフィスト』と『ピレポス』という対話篇において示されているからである。もともと『国家』がプラトンの主著として扱われるようになったのは近代になってからのことであり、そうしたことを考慮に入れると、本書のテキストの選びかたについてたんに不当とは言えず、かえって興味深くさえある。

本書はテキストの読解という哲学の基礎的な営みを押しだすことを通じて、「テキストとともに思考を継続すること」と「読者を誘おうと願い、哲学史を教説（ドグマ）で満ちた宝物庫としてではなく、知と無知の間を動く「真理

への渴望」(一四八頁参照)として描いてみせている。ただし、哲学史が「哲学そのものである」からには当然のことではあるが、哲学者たちの思考の帰結を明快に知りたいたいとする人びとは本書の読者には不向きであろう。かれらの眼差しをも向き変えさせることができるのかどうか、本書はむしろ読者を選んでしまうようにも思われる。

(二〇〇六年、二九〇頁)

注

1 本書の著者によるレヴィナス『全体性と無限(上・下)』(岩波文庫、二〇〇五・二〇〇六)の翻訳には親切な訳注が付されているが、古代中世の哲学が「現在でも哲学の現場にしばしば呼びもどされ、その探求をみちびく、なおも生きつづけている思考の運動」であることの証であるとも言えるものである。それは、近現代のヨーロッパの哲学者たちのテクストを読み解くためには、どれほど古代中世の哲学のテクストに向かわなければならないかを示している。

2 ついでに、テクストの扱いについて一つ注文を付け加えておこう。本書ではディールス・クラントの『ソクラテス以前哲学者断片集』を基本テクストの一つとしているが、それゆえに、一九九九年に解読の結果が公表されたエンペドクレスの「新断片」についての考慮がされていない記述となっている。すなわち、本書ではエンペドクレスについて『自然について』と『浄化』という二つのテクストに言及しているが(四七頁)、新断片はそれらが実は単一の作品である可能性を強く示唆しており、エンペドクレス像の書き換えが必要であるように思われるからである。新断片についての直接的な言及は難しいとしても、エンペドクレスを自然学的な関心を中心に描くのではなく、むしろ魔術的な色合いを帯びた姿において読み解くほうがよかったと思われる。なお、エンペドクレスの新断片については、内山勝利「解体する自然のさ中なる生 エンペドクレスの「新断片」発見によせて」『現代思想』(一九九九、八)一〇〇〜一〇七頁を参照。とはいえ、このことは、巻末の邦語文献一覧について「読書案内」をかねたものとしていること(「あとがき」二五五頁)からも分かるように、一般の読者が引用されているテクストに自分で触れることができるようにという配慮に伴って生じたものである。新書版という制約を考えると、むしろ、このような注文が可能になるほど、本書はテクストにそくしている」と評すべきであるかもしれない。

3 本書におけるテクストと論点の選びかたの評価は続巻(近・現代篇)の刊行をまつてなされるべきなのであろう。